



《8月に読む蔵で取り組む作品(プレ読む蔵)》



「だれも知らない小さな国」(物語) 佐藤 さとる 作

夏休みのある日、トリモチを取るためのものちの木を探すため、近所の里山に一人で出かけた三年生のぼく。誰も近付こうとしない小山が気に入り、秘密の場所にする。実はこの小山には「こぼしま」と呼ばれる小人が住んでいるらしい、という言い伝えを聞いたぼく。ぼくはこの「こぼしま」と呼ばれる小人に会うことは出来るのだろうか。この「こぼしま」の言い伝えの真相は…。日本ではじめての本格的ファンタジーの傑作。



「冬の家出は楽じゃない」(物語) ～ハム・ソーセージ物語～ 那須 正幹 作

この物語の主人公、公子と清司は、ふたごの姉と弟。今まで清司がピンチの時は、いつも姉が助けに来てくれた。ある日突然、友達の「陽子」が家出をすると言い出し、それに付き合うことになった公子と清司。彼らは山のふもとの小屋でひと晩泊まる變成ってしまう…。元気な姉とちょっぴり気の弱い弟が、巻き起こすユーモラスで、楽しい物語。

《8月に読む蔵で取り組む作品(受講1年目)》



「きよしこ」(物語) 重松 清 作

主人公は、ひとりぼっちの少年「きよし」。彼は転校生。彼は言いたいことが言えないから、思ったことを何でも話せる友達が欲しかった。この物語は、ある年のクリスマスの夜、不思議な少年「きよしこ」との出会いから始まる。出会い、別れ、友情、ケンカ、そしてほのかな恋…。果たして「きよし」は、自分の大切なことや言いたいことを伝えることは出来るのだろうか。大切なことを言えなかつたすべての人にささげたい少年の物語。



「少年の海」(物語) 横山 充男 作

この物語の主人公は、小学六年生のヤッチャン、太、恵子の三人。ヤッチャンと太は、六年生の男子だけが参加できる遠泳大会に申し込んだ。しかし、彼らには大きな問題があった。果たして彼らはその問題を解決できるのであろうか…。大人への階段を登ろうとしている小学六年生たちの揺れ動く心と、それをあたたかく見守る大人たちの姿が、読む人に感動を与える物語。



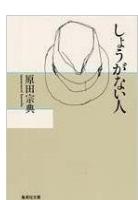
「日本語教室」(評論) 金田一 春彦 作

日本語とはどんな構造をもち、どんな特色をもった言語なのか?外国語とくらべて、わかりやすいのか、わかりにくいのか?学習しやすいのか、しにくいのか?童謡、歌謡曲から庶民の普通の会話、文豪の作品から古典まで、日本語とは何かをわかりやすく解説する楽しい講義。



「サンタ・エクスプレス」(物語) 重松 清 作

鈴の音ひびく冬が、いとおしい人の温もりを伝えてくれる。ものがたりの歳時記「冬」の巻、12編。



「メロンを買いに」(小説) 原田 宗典 作

無免許運転で捕まった父。気取っていても気弱で家族にやっかいなばかりかける、しようがない人。そんな父をうとましく思う反面、深い愛情を抱く息子のアンビヴァレンスな気持ちを軽快に描く表題作。「非のうちどころのない球形」のメロンをもとめて街を彷徨するぼくの、交錯する現在と過去の物語。繊細で豊かな傑作作品集。



「コミュニケーションの日本語」(説明) 森山 卓郎 作

「こんなにちは」は家族に言わない?「本当」と「ほんと」は違う?なにげなく使っている言葉を見直してみると、日本語のおもしろい仕組みが見えてくる。プレゼンテーションや日常会話で、自分の思いをきちんと伝え、相手をしっかり受けとめる“伝え合い”を豊かにするための楽しいヒントが書かれている。





《8月に読む蔵で取り組む作品(受講2年目)》



「いもうと物語」(物語)

氷室 洋子 作

この物語の舞台は昭和四十年代の北海道。主人公のチヅルは小学4年生。そんな彼女の周りでは、毎日様々な騒動が巻き起こる。チヅルの目で見たことや感じた友達や家族のことが、いきいきと綴られている。夢見る少女の数々の体験を季節感豊かに描いた甘酸っぱい連作短編集。



「“自分の木”の下で」(隨筆)

大江 健三郎 作

「なぜ子どもは学校に行かなくてはいけないのか。」本書は作者が初めて書いた子ども向けの本である。人はそれぞれ「自分の木」と決められた樹木に出会うことが出来るのだろうか。生きる理由と方法、言葉、戦争、勉強の方法などをテーマにして、悩める子どもたちの素朴な疑問に、やさしく、深く、思い出も込めて答える。暗闇に迷い込んだ子どもたちやその親の心にどよまる感動のエッセイ。



「毛利先生」(物語)

芥川 龍之介 作

「友人の批評家」が「自分」に、急死した教師の代わりに来た中学時代の英語教師「毛利先生」のエピソードを語るという話。かつては先生を侮蔑したが、やがて先生の健気な人格を認め教育者として尊敬する。



「若者の法則」(説明)

香山 リカ 作

今どきの若者の、一見理解不能・非常識とも思える行動の奥には、彼らなりの論理にもとづく真剣な思いや悩みが隠されている。精神科医である著者が、若者の行動や発言を大まかに六つの法則に従いながら読み解いていく。



「坊っちゃん」(小説)

夏目 漱石 作

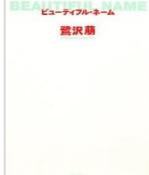
学校を卒業した「坊っちゃん」。正義感あふれる彼は四国の中学校に英語教師として赴任する。偽善的な大人たちを相手に坊っちゃんは大騒動を繰り広げる。作者の実体験をもとに描かれた爽やかでユーモアあふれる作品。



「数学者の言葉では」(隨筆)

藤原 正彦 作

苦しいからこそ大きな学問の喜びがある。父・新田次郎に励まされた文章修業…若き数学者が真摯な情熱とさりげないユーモアで綴る随筆集。



「眼鏡越しの空」(物語)

(ビューティフル・ネーム収録)

鶴沢 萌 作

35歳で急逝した鶴沢萌が生前から構想していた、一つの主題に貫かれた三つの物語。最終篇はパソコンに遺され未完に終わった。



「藤原悪魔」(隨筆)

藤原 新也 作

マユゲ犬の伝説、アイルランド・シチュー、サイババの足、猫の島探訪、国際オヤジ狩り元年、バモイドオキ神の降臨、ある野良猫の短い生涯について…藤原新也の目に捉えられた四十二の時代の風景を記録した写真文集。



「日本語が亡びるとき」(隨筆)

水村 美苗 作

第8回(2009年) 小林秀雄賞受賞。豊かな国民文学を生み出してきた日本語が、「英語の世紀」の中で「亡びる」とはどういうことか?明治以来豊かな近代文学を生み出してきた日本語が、今、大きな岐路に立っている。我々にとって言語とは何なのか。



「白桃」(物語)

野呂 邦暢 作

短篇の名手の代表作に加え、原爆をテーマにした単行本未収録作品「藁と火」を収録。豊かな詩情、現実に立脚した視点によって紡ぎだされた確かな文学がここにある。